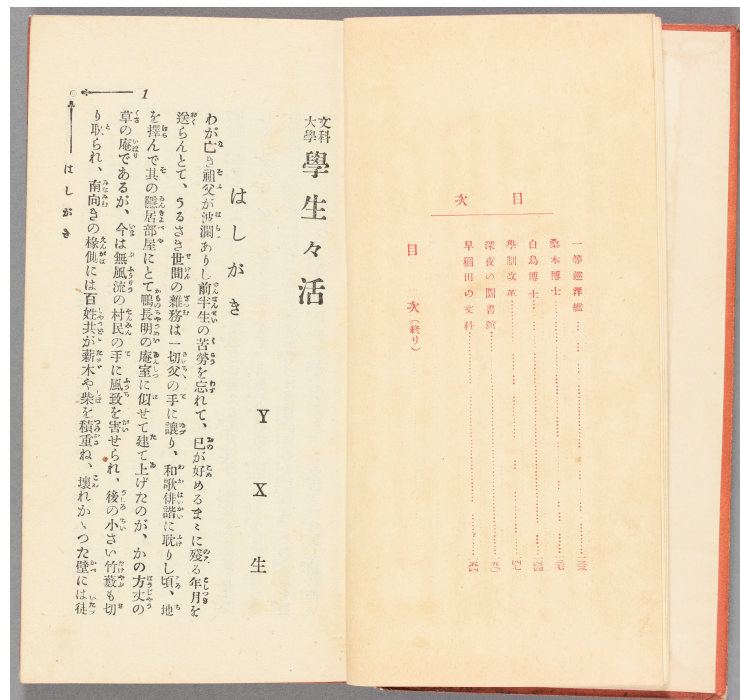


＜早稲田の本棚から＞館蔵資料紹介

正宗白鳥『文科大学学生々活』

明治 38 年（1905）10 月 1 日刊 今古堂書店 稲門ライブラリー（非公開）

馬渕 敬子（特別資料室）



正宗白鳥（1879–1962）は、明治 36 年（1903）6 月に読売新聞社に入社し、明治 40 年（1907）に退社するまでの間、美術、文芸、教育等の記事を担当していた。実際には、入社前の明治 34 年（1901）から近松秋江（1876–1944）らとともに、同紙の「月曜文学」欄に文学や芸術の批評を発表していたので、読売紙上での文筆活動は 7 年に及ぶ。

『文科大学学生々活』は、同紙に同じ題で明治 37 年 12 月 23 日から翌年の 2 月 27 日まで、延べ 30 回にわたって連載された。それが再編され、明治 38 年 10 月に今古堂書店から刊行される際に、4 回分が削除され、新たに 5 節が書き下ろされた。このことは、福武書店刊『正宗白鳥全集第 26 巻 随筆一』（昭和 61 年 3 月）の解題に詳細に対照されており、また、明治 38 年 10 月 6 日の読売新聞朝刊に掲載された同書の広告によっても確かめられる。著者名は紙上発表当時から「XY 生」であり、このペンネームは「XYZ」、「菱生」などとともに、白鳥の読売新聞時代に用いられた筆名の一つであった。

内容は、上記広告文に「現今文科大学学生を中心とし一般の大學生の氣風」、「日常の生活状態」、「諸教授講師の評判」とあり、また、単行本の序に「XY といふ文科生の立場より見たる學生雜感」と記しているように、帝大文科の一学生による随筆という体を取った虚実ないまぜの作品である。（ちなみに、上述の福武書店版正宗白鳥全集では、上記第 26 巻「随筆 一」に全篇が収録されており、新潮社版正宗白鳥全集は、第 6 巻「評論（一）」（昭和 40 年 8 月刊）に「漱石と柳村」の一篇のみを収録している。）

さて、ここに一つの興味深い事実がある。実は、上記福武書店版全集の解題には、次のような記述が見られる。

……署名は XY。表題は『^{文科大学}学生々活』。総ルビ。読売新聞社編、今古堂書店刊行の『^{文科大学}学生々活（明治三十八年十月一日発行）に収録。

（中略）但し、今回は初版本を確認できず、再版本（明治三十八年十月五日発行）を底本とした。

初版発行後わずか 4 日にして再版が出たとは、どういうことなのだろうか。そして、全集を編纂するに当たり、おそらくは探索の手が尽くされたであろうにもかかわらず、「初版本を確認でき」なかったのは、いったい何故だったのだろうか。

2015 年の暮れ、古書店から送られてきた目録の中にこの書を見つけた私は、稲門ライブラリー担当者として、この資料の購入可否を判断するべく、調査を開始した。そしてほどなく、上記解題の記述に出会い、瞠目させられたのであった。古書店の目録には、はっきりと「初版本」と記されている。全集編纂時にも見つからなかった幻の初版本ということなのか？

年の瀬を挟んで悩みに悩んだ末、新年早々に見計らいを依頼し、到着したこの本を開いた私は、思わずニヤリとした。巻頭 2 行目の著者表記は、なんと「YX 生」だったのである（写真参照）。これでは初版の出回りようはない。おそらくは早々に回収され、大至急訂正の上、再版本が出されたのであろう。

ついでに言えば、本書の広告は、上述のとおり 10 月 6 日の朝刊に掲載されている。つまり、再版本に対する広告ということになるが、もちろん、「好評のため重版決定！」などの文字は、躍りようもなかったのである。

参考文献：『増補改訂 新潮日本文学辞典』（新潮社 1988 年 1 月刊）

なお、本書は国立国会図書館にも初版が所蔵されており、国立国会図書館デジタルコレクション（<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/813519>）でご覧になれる。